

## 院内各部門の現況

### 回 想

名寄市立総合病院理学療法科主任 吉 谷 敬

時が経つのは早いもので、私が名寄市立病院に就職してもう6年が過ぎてしまった。地域医療に貢献したい、一度生まれ故郷に帰りたいという気持ちと名寄市立病院がPT、理学療法士を採用したいという気持ちがシンクロし札幌という都会の誘惑に打ち勝って就職したのが昭和62年4月の事だった。

その時、病院はもちろん今は無き旧病院でリハビリは1階の正面玄関のすぐ様、わずか50㎡弱くらいの本当に小さいスペースで最初見たときには、「やっぱり就職やめようかな」と真剣に考えたくらいだ。

その当時の私のスタッフは現助手の清水さんと現精神科病棟の蛭名さんだった。

なんせ卒業したての半人前だから失敗ばかり、大学時代に教わった理想ばかりが先行し現実が追いついていないという状態がしばらく続いた。5月になり蛭名さんが病棟に戻り、代わりに精神科病棟より山内さんがリハビリにやって来た。

それにしてもよくけんかした記憶があり、横山前事務局長、小川前管理課長、その当時の小栗係長、辻係長等には大変御迷惑をおかけしたはず、けれどよく理解していただいた。もちろん遠藤元副院長、高橋元副院長、菊地前院長にも……。

ようやく仕事にも慣れ、ペースがつかみかけた夏、運動療法の施設認可をという動きが起き精神科病棟3階の使用していないスペースを改造し、基準の取得できる運動療法室をつくった。この時やっと患者にまともなリハビリができる場所ができた、と思わず泣けてきてしまった記憶がある。

年を越し63年の2月、名寄市保健センターが完成しそれを機に保健センターでのリハビリ教室を任されることとなった。と同時に胃潰瘍にもなってしまった。ストレス性のものだとみんなには説明して同情をかうはずだったが、飲み過ぎだとみんなに言われた。だが、私は本当に忙しかったのだ(仕事も、遊びも……)。

年度が変わり昭和63年4月、もう一人のPT、坂本

君と精神科リハビリ、精神科作業療法のOT、作業療法士の窪田君がやって来た。

坂本君の加入により本格的に施設基準の獲得に動き始めた。小川前課長と道庁を訪れ担当者に図面を見せたところこれでは無理、とはっきりと言われ再度改修ということになった。改修後再度申請にいくと今度は違うことを改善するよう指導され、改善して再度申請にいくとまた違うことを改善するよう指導されるの繰り返しで幾度となく続いた。

8月には美深町よりリハビリ教室の保健事業開設にあたり年に数回出張することとなる。以後美深町との付き合いは現在も続く。

平成元年、精神科作業療法助手として山内さん(当時は大高さんだったが)がスタッフに加わった。6月には精神科病棟に山内さんが病棟に戻り、代わりに中村さんが精神科病棟より来ることとなる。この時あたりから新病院に向けての仕事が入り始めた。

平成2年10月ついに施設認可を取得することができた。4年越しの実現であり本当に嬉しかった。お世話になった皆さんを集めて宴会を開いた記憶がある。

平成3年にわかには新病院に関する仕事が忙しくなってくる。4月には風連町でもリハビリ教室を行うこととなり出張することとなる。これは現在も続く。6月、精神科作業療法の施設認可も承認され、はれて医療点数を申請できることとなる。平成3年後半は新病院の打ち合わせの嵐だった。特に購入予定の備品に関してはしつこいくらい打ち合わせをした。忙しかったが自分が働きやすい、患者が使いやすい、どこにも負けない施設を、という思いが忘れさせてくれた。

平成4年作業療法士の窪田君が名寄を去り、代わりに高橋さんが就職する。そしてリハビリ助手として新たに丸谷さんが加わる。

6月、待望の新病院がついにオープンする。あの時の感動は一生忘れられないのではないだろうか。引越しが終わった日に廃墟と化した旧病院のリハビリで、

食べたジンギスカンはおいしかった。旧病院では部屋も狭く、30分ごとに患者を入れ替えながら訓練をしていたが、新病院では長時間訓練が可能になりたっぷりと自主訓練もできるほど広いので患者さんの訓練効果も早くできるようになったし、訓練器具の充実は道北随一と自慢できるリハビリ施設だと思う。

7月には中村さんが精神科病棟に戻り、新規に助手として岩田さんが加わることとなる。

現在、5年度に加わった作業療法士の窪田君（以前いた窪田君とは関係が無い）、退職後助手として働い

ただけることになった大宮さんが加わり現在リハビリテーションスタッフは、全員で9名いる。最初の3名からのスタートから考えると実に3倍に増えたことになる。そして今在宅医療、在宅ケアが叫ばれており医療・保健・福祉の連携が必要不可欠なものとなっている。この中で名寄市立病院のもつ役割は極めて大きくリハビリもますます発展しなければならないだろう。病院リハビリだけでなく“出前”のリハビリの実現へ向けこの名寄市に、名寄市立総合病院に期待したい。

## 『中国医療事情』

久保田 宏

本年7月下旬招待を受け、中国秦皇島市中医医院を訪問した。その際中国医療の一部を垣間見てきたので、メモ的に書き綴ってみたい。

### 医 療 費

最初に中国の皆さんの収入のことを述べておかねばならない。労働者の月収は120元～150元（1元は20円）、病院医師、幹部でも400元くらいだ。このことを考慮に入れて読んでいただきたい。

中国における医療費には各省、特別市が独自に決めている。ただし、設備の優れている病院とか、同じ検査でも輸入した高額機器を使用する場合には特別料金となる。

まず一般的な医療費として、初診料は0.5～1.5元、1日の入院料は一般7元、個室では15～20元くらいである。食事代は別で、メニューの中から患者さんが選択し3～10元である。このあたりはさすが中国である。

次に検査料金であるが、CTは300元、血管造影（動脈）150～500元、胃カメラ・腹部エコー20元、血球算定2元、尿一般検査1.5元、GOTとGPTで6元などである。

手術料金は胃切除術、胆嚢摘出術が200元、食道癌の手術500元、虫垂切除術80元、輸血200ml100元、輸液1000ml8元くらいである。

これらの費用を日本円に直すと非常に安いだが、中国の皆さんの収入額からすると胃切除術の場合、労働者の月収で約2ヵ月分に相当する入院費用である。

しかし現在、政府職員、軍隊、工員は全額もしくは70～80%負担であるが、自営業、農民の人達は全額自己負担である。この点は、中国医療制度の欠陥であると思う。

### 医 師

日本でいう医者、つまり医師を養成する医科大学は日本と同じ制度で6.3.3.制で高校から進学、修業年限は8年・6年・5年制とさまざまである。教科は一部または全課程を日本語・英語・フランス語などの外国語で教育する大学もある。

2000年の伝統を持つ中国医学（中医）であるが、清朝末期に西洋医学が入ってから次第に地位が低下していたが、解放後に再び見直され重視されている。現在では各省、特別市、自治区のほとんどに5年制の中医学院がある。

私の訪問した秦皇島市中医医院は、文字通り中国医学（東洋医学）中心の病院で西洋医学は外科、整形外科の2科である。明年2月には、中医医院の院長・外科医長を当院に招待してある。院長は中医の専門医なので興味のある話しがきけるであろう。